

## 超常現象に対する肯定的信念の形成に関する研究 (1) — 個人要因の影響 —

岩永 誠・坂田 桐子

広島大学総合科学部人間行動研究講座

### Preliminary research on the dominant factors in paranormal beliefs (1): Effects of personal factors

Makoto IWANAGA & Kiriko SATAKA

*Department of Behavioral Sciences,  
Faculty of Integrated Arts and Sciences,  
Hiroshima University*

**Abstract :** In 1990s, concerns to paranormal phenomena are mentioned to be greater among young Japanese people, which phenomena were new types of religion, supernatural powers, an afterlife, a personality stereotype by blood-typing, and ghost stories at school by comics and films. The present study aimed to investigate interests and paranormal beliefs and the effects of personal factors on the paranormal beliefs, using 321 undergraduates. Degrees of interest and belief concerning to 10 supernatural phenomena were lower than those in the previous studies. From the results of multiple regression analysis, affecting factors were different among four types of paranormal phenomena. Beliefs in existences of ghost and reincarnation and superstition were mainly affected by external attribution such as fate, fortune, and anti-scientism. On the other hand, level of anxiety affected only beliefs in existences of undefined creatures and cultures. Time perspective, however, affected none of supernatural phenomena.

キーワード：超常現象、不安、制御の所在、反科学観

#### 序 論

1970年代からの神秘・オカルトブームは、現在第二次ブームを迎えたといわれている。20世紀も後2年という世紀末を背景に、ノストラダムスの大予言といった人類の終焉を予言した予言書を扱った本も数多く発刊され(山本、1998参照)、超常現象ブームの一端を担っている。こうした神秘・オカルトブームの流れには、①幸福の科学やオウム真理教といった新宗教の台頭、②ノストラダムスの大予言やファティマ第3の秘密といった人類滅亡に関する予言、③1973年の「こっくりさん」、1979年の「口裂け女」をはじめとして、1995年頃から特に顕著になった学校の怪談ブーム、

---

1998年10月2日受付；1998年11月2日受理

及びオカルト映画ブーム、④女性雑誌を中心に広まった血液型性格判断、⑤心霊手術や超能力、といったいくつかのパターンに分けることができる。

西山(1991)は、大学生を対象に9つの超常現象に対する興味を調べた結果、4割から6割の学生が超常現象に興味を抱いていることを明らかにしている。実在していると考えている割合もかなり高く、3割から6割にも達していることがわかった。霊の存在を信じる程度について世代間比較を行った柿田・藤田(1991)は、10代、20代で霊の存在を信じている割合が最も高くなると報告している。このように、超常現象に対する興味や関心は、青年期で高くなっている。

それでは、超常現象を信じることにどのような背景があるのだろうか。松井(1997)は、TV聴取傾向と超常現象を信じる程度について調べ、超常現象を信じやすい高校生はTVをよく見ていると報告している。特に男子ではその傾向が強く、娯楽番組の1つとして超常現象に関する番組を見ており、その影響を受けているのではないかと指摘している。西山(1991)は、1970年代初期に起きた神秘ブームには、まずマスコミレベルでの流行があったと指摘している。1973年には「オカルト」(コリン・ウィルソン著)や「ノストラダムスの大予言」(五島勉著)が刊行され、1974年にはユリ・ゲラーによる「スプーン曲げ」の公開実験が行われるなど、マスコミがブームの火付け役になっている。

松井(1997)は、高校生を対象として超常現象を信じる心理的背景の関連を調べた結果、男子では宗教関心・科学限界感・学校適応・問題行動念慮が超常現象の信じやすさと関係しており、女子では宗教関心・科学限界感・同調性が関与していたと報告している。男女に共通しているのは、宗教関心と科学限界感であり、高校生が科学万能主義の限界を強く感じ、宗教という精神世界に対して抱いている興味が重要な規定要因となっている。また女子のみで関係している要因である同調性は、女子が流行として超常現象を信じやすいことを示している。

西山(1991)は、新宗教への興味は、従来の現世利己的志向だけでなく、新たな自分を模索したり、宗教における超能力そのものに対する興味から生じていると指摘している。特に青年は豊かな物質文明から生じた貧困なる精神の充足を、宗教や超能力といった世界に求めていると述べている。まさに同一性拡散状態にある青年が、同一化の対象として宗教や超能力を求めようとしているのである。1997年7月に人類が減びることを理由に、遊んで暮らすとか正業に就かないといった「ノストラダムス症候群」(山本、1998)も、将来への展望を抱けず、利己的になっている現代青年の典型だといえる。時間的展望の中で自己を位置づけ過去を受容することは、同一性の形成と関連している(Baldo, Harris, & Crandali, 1975; 都築、1993)ことから、ノストラダムス症候群のように、未来への展望がもてず利己的であることは、同一性拡散の一例だといえる。また、自分の将来に対して不安を抱き希望を持っていないことは、自分の努力で将来を切り開いていこうとする行動につながりやすく、安易に他者の考えを受け入れたり、型にはまった行動や考えをしやすくなる。自分の運命を受け入れやすくなり、占いや迷信といったものに行動が左右されやすくなると考えられる。

1970年代からは、経済的にも物質的にも安定した社会であり、自己の努力や結果と飢えや苦しみとに直接的な関連がなくなった時代でもある。そのため、生活のために何かをしようかとか、もっと豊かになるための努力をする必要はなくなった。その一方で、高い生産性を上げるための管理による閉塞感は深まるばかりである(西山、1991)。人生で成功する要因として「運」や「縁故」をあげる学生が増えており(大村、1987)、豊かさであるが故に地道な努力が報われにくいと青年が感じているのである。行動の帰属が外的、とりわけ「運」に帰属されやすい傾向が強くなってきているといえる。占いや血液型性格判断のように、人生はすでに決められてしまっていて変えることができないと考えることは、無駄な努力をしないことに対する都合のいい理由として用いられ、ス

トレスを感じることなく自分の行動を正当化できる方法でもある。

1979年に日本中の子どもを恐怖におとし入れた「口裂け女事件」は、熾烈な受験戦争に明け暮れていた子どもたちが、母親のイメージに照らして作り上げた想像上の産物であり、受験という慢性的な不安がうわさを広める働きをしたといわれている(中村、1994)。新宗教ブームとなった1970年代は、高度成長が一段落し、オイルショックをはじめとする社会不安が高まってきた時代である。第2次ノストラダムスブームとなり、幸福の科学やオウム真理教といった新宗教が急成長を遂げた1990年代も、湾岸戦争に始まり、バブルの崩壊による就職難やリストラに伴う高い失業率という社会不安の高まった時代である(西山、1991)。このように、不安が疑似科学的信念の形成や伝搬に関与していると考えられる。

以上のように、疑似科学的信念の形成や流行は、個人が感じている不安の程度、出来事を外的なものにせよする外的原因帰属傾向、同一性拡散やそれに関連する時間的展望の低さといった個人要因による影響を受けていると考えられる。本研究は、疑似科学的信念の形成に影響を及ぼしていると考えられる要因のうち、個人要因に焦点を当てて検討することを目的とした。

## 方 法

<調査対象者> 心理学系の授業を聴講している大学生321名(男子141名、女子180名)を調査対象者として用いた。平均年齢は、18.6歳( $SD=0.77$ )であった。

<調査項目> 調査は、以下の6つの下位尺度から構成されていた。

- (1)制御の所在(Locus of Control: LOC) Levenson(1981)の制御の所在尺度のうち、下位因子の内的統制と外的統制である運に関する項目に、新たに占いや運命に関する項目を付け加えた全10項目からなる。回答は5件法で行った。
- (2)不安 岩永(1988)の3要因不安尺度から、認知次元4項目、行動次元3項目、生理次元3項目の計10項目からなる。回答は5件法で行った。
- (3)時間的展望 白井(1994)の時間的展望体験尺度の全18項目を用いた。下位因子として、目標指向性、希望、現在の充実感、過去受容の4因子からなっている。回答は5件法で行った。
- (4)超常現象の体験 10の超常現象(超能力、霊魂、UFO、たたり・怨念、輪廻転生、予言、虫の知らせ、死後の世界、こっくりさん、狐つき)について、①興味があるか、②実在すると思うか、③体験したことがあるか、④体験した友人がいるか、を回答させた。①興味に関しては5件法で、②~④については、はい・いいえ・わからないの3件法で行った。
- (5)疑似科学的信念 超常現象を信じている程度は、超自然現象信奉尺度(中島ら、1993;安斎、1995より引用)全20項目を用いた。超自然現象信奉尺度は、霊、超能力、迷信、超生命・超文化の4因子から構成されている。各項目5段階で評定させた。
- (6)反科学観 科学ではわからないことがあるとか、科学が不幸をもたらすといった反科学的な考えについて、松井(1997)を参考に5項目を設定した。各項目5段階で評定させた。いずれの尺度も、5段階評定を行っている場合、数値が大きくなるほどその傾向が強くなることを示している。

<調査方法> 調査は、1998年4月に実施した。調査票を授業中に配布し回答させた。回答に要した時間は、約15分であった。

<分 析> (4)超常現象への興味と(5)情報接触頻度以外の5尺度は、因子分析(主因子法バリマックス回転)を行い、因子の確定を行った。抽出された因子を元に、疑似科学的信念の形成

に影響を与える要因を調べるため、超自然現象信奉尺度を目的変数とし、不安、制御の所在、時間的展望、反科学観、超常現象の体験を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。変数の投入はF検定の確率が0.05、除去が0.1を基準とした。

## 結 果

### 超常現象への興味と体験頻度

表1は、超常現象への興味、超常現象が実在すると思うか、体験したことがあるか、体験した友人がいるかについて、10の超常現象別に示したものである。興味については5段階評定の平均値を、実在・体験・体験した友人についてはあると答えたパーセンテージを示してある。

各超常現象の興味は、10現象中8つまでが3の「どちらでもない」と評定されていた。「こっくりさん」や「きつねつき」ではさらに興味の程度が低くなっていた。実在すると思っている割合の高い超常現象は、「虫の知らせ」、「UFO」、「霊魂」、「超能力」で、3～4割が実在すると答えているものの、比較的よく知られている「こっくりさん」や「きつねつき」は1割以下しか実在すると思っているものがないことがわかった。

体験したことがあるものとして、「虫の知らせ」が15%、「こっくりさん」が9.3%、「霊魂」が5.6%となっているほかは、体験していると答えたものはほとんどおらず、超常現象の体験者はかなり少ないことがわかる。また、友人の体験した超常現象では、「霊魂」、「こっくりさん」、「虫の知らせ」が多く、約2割もいることがわかった。総じて体験した割合よりも高くなっているが、全体的にわずかしかないことがわかる。

超常現象が実在していると思う割合や体験したものの割合は、かなり低いといえる。超常現象の中で実在していると思う現象数の平均は2.5 ( $SD = 2.4$ )であり、体験したことがある現象数は0.4 ( $SD = 0.7$ )、友人が体験した現象数も1.0 ( $SD = 1.3$ )となっていた。実在していると思っていたり、体験したことがある超常現象の数は、かなり少ないことがわかる。

表1. 超常現象に対する興味及び体験の頻度

	興味 <sup>1</sup>		実在 <sup>2</sup>	体験 <sup>3</sup>	友人 <sup>4</sup>
	平均	SD			
1. 超能力	3.1	1.3	29.3	0.6	5.3
2. 霊魂	3.0	1.3	35.8	5.6	26.5
3. UFO	3.1	1.4	36.8	2.5	10.0
4. たたり・怨念	2.8	1.3	26.8	0.6	5.6
5. 輪廻転生	3.1	1.4	23.1	0.0	0.9
6. 予言	3.0	1.3	24.9	4.0	4.7
7. 虫の知らせ	3.0	1.3	42.7	15.0	18.4
8. 死後の世界	3.0	1.3	22.7	0.0	2.2
9. こっくりさん	2.0	1.1	5.9	9.3	23.1
10. きつねつき	1.9	1.1	4.7	0.3	1.6

note : 1 : 興味 (1:全くない～5:非常にある)  
 2 : 実在すると思うか (パーセント)  
 3 : 体験したことがある (パーセント)  
 4 : 体験したことがある友人がいる (パーセント)

## 各尺度の因子分析

各尺度の因子分析の結果は、表2～6に示した。項目ごとの平均、標準偏差、その因子での負荷量を示してある。因子のCは寄与を、 $\alpha$ がクロンバックの $\alpha$ 係数を指している。

## 1. 制御の所在

表2に示したように、因子分析の結果3因子が抽出されたが、1項目のみいずれの因子にも属していないことがわかった。第1因子は占いや運命といった長期的に外的統制を受ける「運命」の因子、第2因子は自分の力や努力によるものとする「内的統制」の因子、第3因子は運や神頼みのように短期的に外的統制を受ける「運」の因子であった。クロンバックの $\alpha$ 係数は、第1因子から0.568、0.550、0.406で、中程度の内的一貫性を示していた。

表2. 制御の所在尺度の因子分析

	平均	SD	負荷量
「運命」因子(C=1.83, $\alpha$ =0.568)			
占いに悪いことが書いてあると、行動に気をつける	2.3	1.29	0.779
新聞や雑誌の占いの欄をついみてしまう	3.7	1.44	0.768
人は生まれたときから運命が決まっている	2.4	1.28	0.461
「内的統制」因子(C=1.71, $\alpha$ =0.550)			
思い通りの結果になるのは、たいてい、私があるためにこのほか努力をしたときだと思う	3.4	1.08	0.782
私の人生は、私自身の日常の行動によって決まるだろう	3.7	1.16	0.733
人生になにが起きるかは、自分の力で何とか決めていくことができると思う	3.6	1.10	0.542
「運」因子(C=1.48, $\alpha$ =0.406)			
私が多くの人に恵まれるか否かは、もっぱら運次第だと思う	2.2	1.02	0.742
困ったとき、神頼みをする	3.3	1.44	0.534
私の思い通りになったときは、いつも運が良かったのだと思う	3.3	1.24	0.488
私の人生は、たいていは偶然の出来事に左右されていると思う	3.3	1.15	

## 2. 不安

表3に示したように。因子分析の結果、3因子が抽出された。第1因子は認知次元の不安を、第2因子は行動次元の不安を、第3因子は生理次元の不安を表している。 $\alpha$ 係数は、認知次元で0.829、行動次元で0.655、生理次元で0.728と、中程度からやや高い内的一貫性を示していた。

表3. 不安尺度の因子分析

	平均	SD	負荷量
「認知」因子(C=2.57, $\alpha$ =0.829)			
つまらぬ考えに悩まされることが多い	3.7	1.22	0.860
実際にはさほど重要でないことなのに、思い悩むことがある	3.8	1.20	0.809
神経質なタイプである	3.3	1.25	0.777
不安な気持ちが心から離れなくなることがある	3.6	1.21	0.621
「行動」因子(C=2.17, $\alpha$ =0.655)			
困難なことにつつかると、打ち勝てないような気がする	2.7	1.17	0.769
自信に欠けている	3.2	1.24	0.761
あまり知らない人となると、かたくなる	3.5	1.27	0.622
びっくりすると、体がこわばって動かなくなることがある	2.3	1.19	0.517
「生理」因子(C=1.66, $\alpha$ =0.728)			
よくめまいがする	1.9	1.12	0.866
頭が痛くなることがよくある	2.1	1.21	0.861

### 3. 時間的展望

因子分析の結果、表4に示したように4因子が抽出された。第1因子は将来の目標や希望に関する「未来への希望」因子、第2因子は、今の生活に満足していることに関する「現在の充実感」因子、第3因子は、過去のつらさに関係した「過去の否定」因子であった。第4因子は2項目しか含まれておらず、その内容も一貫したものではないことから、因子としての解釈はできないことから、検討の対象から除外した。

$\alpha$ 係数は、「未来への希望」因子が0.848、「現実の充実感」因子が0.793、「過去の否定」因子が0.677となっており、いずれの因子ともに中程度から高い内的一貫性を示している。白井(1994)は、目標指向性、希望、現実の充実感、過去受容の4因子を抽出しているが、本研究では「未来への希望」因子が目標指向性と希望の混在した因子であり、「現実の充実感」と「過去の否定」因子は、白井(1994)とほぼ同じ項目からなっていた。

表4. 時間的展望尺度の因子分析

	平均	SD	負荷量
「未来への希望」因子(C=3.91, $\alpha$ =0.848)			
私には、将来の目標がある	3.7	1.25	0.799
私には、だいたいの将来計画がある	3.3	1.22	0.788
将来のために考えて今から準備していることがある	2.9	1.29	0.732
自分の将来は自分でできひらく自信がある	3.4	1.06	0.674
私の将来には、希望がもてる	3.4	1.02	0.666
私の将来は漠然としていてつかみどころがない	3.5	1.24	-0.656
将来のことはあまり考えたくない	2.2	1.18	-0.573
「現在の充実感」因子(C=2.93, $\alpha$ =0.793)			
今の生活に満足している	3.2	1.14	-0.828
毎日の生活が充実している	3.4	1.06	-0.817
毎日が同じ事のくり返しで退屈だ	2.2	1.08	0.700
毎日が何となく過ぎていく	3.0	1.26	0.666
今の自分は本当の自分ではないような気がする	2.4	1.21	0.490
「過去の否定」因子(C=2.46, $\alpha$ =0.677)			
私の過去はつらいことばかりだった	2.0	0.97	0.771
過去のことはあまり思い出したくない	2.3	1.18	0.758
私は過去の出来事にこだわっている	2.7	1.26	0.647
私には未来がないような気がする	1.8	0.96	0.485
不定因子(C=1.19, $\alpha$ =0.146)			
10年後、私はどうなっているのかよくわからない	3.8	1.14	0.688
私は、自分の過去を受け入れることができる	3.9	1.11	0.513

### 4. 疑似科学的信念

表5に示したように、4因子が抽出された。第1因子は靈魂の存在や靈界に関する「靈」因子、第2因子は超能力や念力に関する「超能力」因子、第3因子は神社へのお参りや血液型性格判断に関する「迷信」因子、第4因子は宇宙人の存在やムー大陸の存在といった「超生命・超文明」因子であった。 $\alpha$ 係数は、第1因子から0.885、0.834、0.739、0.747と比較的高く、高い内的一貫性を示していることがわかった。中島ら(1993; 安齋、1995より引用)と同じ因子が抽出された。

表5. 超自然現象信奉尺度の因子分析

	平均	SD	負荷量
「霊」因子(C=3.44, $\alpha=0.885$ )			
死者の霊は存在する	3.1	1.33	0.804
霊界は存在する	2.6	1.29	0.775
体は死んでも魂は生き続ける	2.8	1.30	0.768
前世や来世は存在する	3.0	1.31	0.693
憑依霊が人につくことがある	2.5	1.20	0.673
「超能力」因子(C=2.97, $\alpha=0.834$ )			
物体を精神の力で浮遊させることのできる人がいる	2.1	1.08	0.804
念力でスプーンを曲げることのできる人がいる	2.6	1.23	0.795
念力で物体を動かすことができる	2.4	1.16	0.791
精神の力で他人の病気を治すことのできる人がいる	2.7	1.26	0.677
「迷信」因子(C=2.69, $\alpha=0.739$ )			
神社にお参りすれば願い事がかなう	2.5	1.15	0.691
血液型によって性格を知ることは可能である	2.7	1.32	0.668
仏滅に結婚式を行うことはよくないことである	2.9	1.43	0.655
掌の生命線が長いと長生きする	2.3	1.20	0.600
北枕にして寝るとよくない	2.6	1.41	0.595
呪文を使うことによって人に呪いをかけることができる	1.8	0.97	0.466
「超生命・超文明」因子(C=2.55, $\alpha=0.747$ )			
古代文明には宇宙人が関係している	2.4	1.21	0.852
ナスカの地上絵は宇宙人に対するメッセージである	2.6	1.15	0.721
政府は宇宙人に関する事実を隠している	2.4	1.35	0.704
ムー大陸は存在した	3.0	1.17	0.588
ネス湖の怪物（ネッシー）は存在する	1.9	1.06	0.428

## 5. 反科学観

表6に示したように、2因子を抽出した。第1因子は科学の進歩が人間らしさを奪ったり不幸につながるという「悲観的科学観」因子であり、第2因子は科学でもまだわからないことが存在する「反科学万能観」因子であった。 $\alpha$ 係数は、「悲観的科学観」因子で0.439と低くなっているが、「科学非万能観」因子では0.699と中程度の高さの内的一貫性を示していた。

表6. 反科学観尺度の因子分析

	平均	SD	負荷量
「悲観的科学観」因子(C=1.88, $\alpha=0.439$ )			
科学はこれ以上進歩しない方がよいと思う	2.7	1.17	0.828
科学が進むと、人間らしさが奪われると思う	3.1	1.21	0.832
科学の進歩は、人類に幸福よりも不幸をもたらしたと思う	2.6	0.99	0.689
「反科学万能観」因子(C=1.30, $\alpha=0.699$ )			
世の中には、科学ではわからないことがたくさんある	4.3	0.83	0.824
科学の進歩がいつも良い結果をもたらすとは限らない	4.5	0.70	0.771

## 疑似科学的信念の形成要因について

超自然現象信奉尺度の4つの下位因子を目的変数とし、不安や制御の所在、反科学観、超常現象の体験を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。表7には、各下位因子ごとに有意な偏回帰係数を示した因子及び自由度調整済み $R^2$ 値を示した。4現象ともに、有意な $R^2$ 値を示している。

「**霊**」因子 「**霊**」を目的変数とした重回帰方程式に取り込まれた変数は、制御の所在の「**運命**」因子と「**運**」因子、反科学観の「**反科学万能観**」因子、友人の超常現象体験であった。いずれも「**霊**」の存在信奉と正の関係にあることがわかった。

「**超能力**」因子 「**超能力**」の存在を信じる程度を目的変数とした回帰方程式に取り込まれた変数は、制御の所在の「**運命**」因子、反科学観の「**悲観的科学観**」因子、友人の超常現象体験であった。いずれも正の関係を示していた。

「**迷信**」因子 「**迷信**」の存在を信じている程度を目的変数とした回帰方程式に取り込まれた変数は、制御の所在の「**運命**」因子と「**運**」因子、反科学観の「**悲観的科学観**」因子、友人の超常現象体験であった。いずれの要因も正の関係を示していることがわかった。

「**超生命・超文明**」因子 ネッシーや宇宙人といった超生命や超文明の存在を信じる程度を目的変数とした回帰方程式に取り込まれた変数は、不安の「**認知**」因子と「**行動**」因子、制御の所在の「**運命**」因子、本人の超常現象体験であった。不安の「**行動**」因子のみが負の関係を示しており、その他の要因は全て正の関係を示していた。

表7. ステップワイズ法による重回帰分析において有意差の認められた標準偏回帰係数 ( $\beta$ )

説明変数		霊	超能力	迷信	超生命・超文明
尺度	因子				
不安	認知				.190**
	行動				-.134*
制御の所在	運命	.306***	.150**	.379***	-.214**
	運	.123*		.238***	
反科学観	反科学万能観	.186**			
	悲観的科学観		.164**	.131**	
超常現象の体験	本人				.146**
	友人	.130**	.120*	.141**	
自由度調整済み $R^2$		.211***	.069***	.329***	.101***

\*: $p<.05$ , \*\*: $p<.01$ , \*\*\*: $p<.001$

以上の4つの下位因子ごとにステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、超常現象の内容により規定要因が異なっていることがわかった。制御の所在の「**運命**」因子は、全ての超常現象に関係しており、友人の超常現象体験は3種の超常現象と関係しており、予測要因として大きな影響を及ぼしていることがわかった。一方、時間的展望は、いずれの超常現象とも関連が認められず、予測要因とはなり得ないことがわかった。また不安も、超生命・超文明のみで関係していただいで、疑似科学的信念に関与している程度は少ないことがわかった。



## 考 察

### 超常現象への興味と信奉の程度

10の超常現象に対する興味と信奉、体験について尋ねた。その結果、興味の程度は、ほとんどの現象で「どちらでもない」という評価がほとんどであり、低い興味にとどまっていることがわかった。西山(1991)は、大学生を対象とした調査において、超常現象への興味は40~60%のものが抱いており、実在していると答えた割合の30~60%と比べると、本研究の結果は半分程度にすぎないことがわかる。霊魂の存在について、本研究では36%が信じているのに対し、柿田・藤田(1991)では同世代である10代で76%、20代で66%が信じていると報告しており、大きな差がある。

西山や柿田・藤田の調査対象者と同じ世代を用いたにもかかわらず、このような違いが生じたのは、本研究と先行研究との間に、6~10年ほどの隔りがあることが関係していると考えられる。この間、オウム真理教による殺人事件やサリン事件をはじめとして、欧米でもブランチ・デイビディアン事件やハーブズ・ゲイトの集団自殺事件などの宗教に関わる事件があり、マスコミ等を通じて新興宗教の問題や怖さが報道されることが多かった。こうした事件により、神秘・呪術現象に関する疑念や不信感が高まり、否定的にとらえる風潮が高まっていた可能性があり、超常現象の非科学性を認識させることに助長的に作用していたのではないだろうか。

超常現象の中でも、中高生が体験しやすいといわれている「こっくりさん」や「きつねつき」に対する興味の程度が低く、実在すると信じている割合も極端に低かった。特に「こっくりさん」は、体験した割合よりも実在していると思っている割合の方が低いという逆転が起きている。これは、70年代からの流行が下火になってきたことと関係があるだろう。70年代のこっくりさん騒ぎでは、病院で治療を受ける中学生が数多くでたことで、学校での対策がなされるようになり(高橋、1993)、こっくりさんについての正しい知識が身についていた可能性が考えられる。また、科学的な観点から超常現象を扱った書籍(例えば、安斎、1995; 中村、1994; 高橋、1993)の出版や超常現象を科学的な観点から解明したTV番組(例えば、特命リサーチ200Xやアンビリバボー)の放送が相次ぎ、疑似科学的信念の形成を問題視する考えが社会に浸透しつつあることも関連している可能性がある。こうした社会教育の効果を明らかにするためにも、マスコミ等からの情報接触や学校・家庭での教育・会話内容を含めた検討が必要である。その一方で、超常現象に関する出版も多く(例えば、ムーやX-ZONE)、インターネットでも超常現象に関するホームページ数は相当多い。その代表的なものである「不思議リンク集」には、平成10年9月現在で、日本国内229、海外49のサイトが登録されている。このように、依然として超常現象に興味を抱いているものも多く、興味についての二極化が生じているのではないかと思われる。こうした二極化がなぜ生じているのかについては、今後さらに検討を進めていく必要がある。

### 疑似科学的信念を規定している要因

4つの超常現象に関する疑似科学的信念を目的変数とし、不安や制御の所在といった個人差要因を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、回帰分析の説明率も超常現象により異なり、「迷信」信奉で最も高く、「超能力」信奉で低くなっており、身近な超常現象の説明率が高かった。超常現象の内容により、規定要因が異なっているものの、外的な原因帰属である「運命」や超常現象の体験が、すべての超常現象に関与しており、これらが重要な規定要因であることがわかった。

「迷信」信奉において説明率が高かったのは、迷信そのものが普段からよく接し、見聞きするという現象自体の日常性に関係していると考えられる。標準偏回帰係数( $\beta$ )が大きかったのは、

「運命」や「運」といった外的な原因帰属傾向で、時間的に見て短期的（運）であろうが長期的（運命）であろうが、外的なものに原因を帰属しやすい人は、迷信を信じやすいといえる。迷信そのものの、「神社にお参りすると願い事が叶う」といった強大な力により影響されるという外的な制御主体の存在を暗黙のうちに想定していることと関係していると思われる。友人の超常現象体験が関与している度合いが高いことも、「迷信」信奉の日常性を裏付ける結果となっている。

「迷信」信奉と類似した要因関係を示しているのが、「霊」信奉である。友人の超常現象体験が主要な規定因になっており、友人間のコミュニケーション・ネットワークの影響を受けやすいといえる。「口裂け女」のうわさが瞬く間に広まり、子どもたちを恐怖に陥れ、警察が出動しなければならないほどの騒ぎになったのも（朝倉、1989）、子どもたちのコミュニケーション・ネットワークの中で、「口裂け女」のイメージが拡大され、より信じ込みやすいような内容へと変容していったがためだといわれている（中村、1994）。

宇宙人や恐竜の存在や古代文明の存在を信じるという「超生命・超文明」信奉は、他の超常現象と規定因が異なり、不安や本人の超常現象体験が関与していた。不安の行動面が負の関与をしていたことから、活動性の高さが信奉度を高めていることがわかる。すなわち、不安を感じてはいるが、活動的であることが、「超生命・超文明」信奉を高めているのである。また、本人の超常現象体験が関与しているのは、「超生命・超文明」だけであることから、「超生命・超文明」が、他の超常現象とは質的に異なる現象である可能性を示唆するものといえる。

友人の超常現象体験が3現象と関係していたことから、超常現象に対する肯定的態度の形成に、友人ネットワークが重要な影響を及ぼしている可能性を示唆するものといえる。松井(1997)は、女子高校生の超常現象信奉に他者への同調傾向が関与していることをあげ、友人関係が重要な役割を果たしていることを示している。友人からの影響が大きいと考えられることから、対人関係を含め社会心理的要因についても検討する必要がある。

個人要因としてあげた時間的展望は、いずれの疑似科学的信念と関係していなかった。未来に対する希望のなさや過去の拒否は、同一性拡散と関連していることから（都筑、1993）、見かけ上の安定を得たり、新しい自己を獲得するために、宗教や超能力のように現実世界から遊離した世界に興味を持ちやすくなるのではないかと考えたのであるが、今回の結果からは、両者に関連は認められなかった。その原因として、目的変数として用いた超自然現象信奉尺度の下位因子は、霊、超能力、迷信、超生命・超文明であり、宗教のような精神世界に関係する因子がなかったことが関係しているのではないかと考えられる。また、時間的展望が、直接疑似科学的信念の形成に影響するのではなく、個人要因に影響して間接的に影響している可能性もあり、今後さらに分析を勧めていく必要がある。また、疑似科学的信念の程度やその規定要因には男女差がある（松井、1997）ことから、男女別の分析も行う必要がある。

## 付 記

本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究B（2）代表浦光博（課題番号09410033）による助成を受けた。

## References

安齋育郎 1995 科学と非科学の間 かもがわ出版

- 朝倉喬司 1989 あの「口裂け女」の棲み家を岐阜県山中に見た！うわさの本<別冊宝島92> 宝島社 Pp.132-149.
- Baldo, R., Harris, M., & Crandali, J. 1975 Relations among psychological development, locus of control, and time orientation. *Journal of Genetic Psychology*, 126, 297-303.
- 岩永誠 1988 3要因モデルに基づく不安尺度作成の試み 作陽学園学術研究会「紀要」, 21, 2, 1-12.
- 柿田睦夫・藤田文 1991 霊・超能力と自己啓発 新日本出版社
- Levenson, H. 1981 Differentiating among internally, powerful others, and chance. In H. M. Lefcote (Ed.), *Research with the locus of control construct*. New York: Academic Press. Pp. 15-63.
- 松井豊 1997 高校生が不思議現象を信じる理由 菊池聡・木下孝司（編著） 不思議現象 子どもの心と教育 北大路書房 Pp.15-35.
- 中村希明 1994 怪談の心理学 講談社現代親書
- 西山茂 1991 第四次新宗教ブームの背景 小田晋（編） 宗教・オカルト時代の心理学<現代のエスプリ292> 至文堂 Pp.34-43.
- 大村英昭 1987 脱世俗化と真宗信仰 現代社会学, 33, 76-103.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 1, 54-60.
- 高橋紳吾 1993 きつねつきの科学 講談社「ブルーボックス」
- 都築学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 山本弘 1998 トンデモノストラダムス本の世界 洋泉社.